

# チェルノブイリ事故

## 誇大報道の欺瞞性を突く

事故発生以来、「動物の奇形」、「白血病増加」等々の報道が世界を駆けめぐり、一方ソ連の医学専門家は直接の放射線被害者は事故当時の現地での三百名以外にはないといひ、国際赤字社の一部では三百万人の被害という言葉も飛び出した。この混乱を極めるなか、チェルノブイリの人々は、何を信ずればよいのだろうか。

森 一久

チェルノブイリ事故は、すでに世界の全電力量六分の一を供給している原子力発電の歴史において、唯一かつ最大の事故であり、その影響は今日でも大きく尾を引いている。最近ややその方向に変化ありとはいへ、欧州では依然として原子力発電モラトリアムがつづいている国も少なくない。それはこの大事故自体の異常さや不可解さに加え、その放射能の影響についての情報が混乱し、センサーシヨナルに伝えられてきたことに大きな原因がある。日本でもこの事故直後には原子

力反対が激増したが、五年たった今日、原子力発電を必要とする人が六四％（総理府世論調査一九九〇年九月）までに回復しているが、一方それと対照的に、原子力を「危険」と思う人は四六％と前年に比べ逆に一〇％近く増加している。では影響の真相は一体どうなっているのか。その前に、チェルノブイリとは一体何だったのか、それをたどってみよう。

### 核軍縮もグラスノスチも

いま我々の眼前で目まぐるしく激動し

つづけている出来事、グラスノスチやベレストロイカ、その挙句の果ての超大国ソ連の瓦解、また国際的には核軍縮の急進展など。これら文字通り歴史的な激動といえる出来事は、実は多くの面でこの事故によってそのきっかけをつくられてきたのである。

ソ連には軽水型（西欧の主流と同型）とチェルノブイリ型との二種の型の原子力発電所がほぼ同数運転している。事故をおこしたチェルノブイリ型——略称RBMK直訳すれば「チャンネル型大型

「炉」型——は軍用と発電の兼用のもので、原水爆の主原料のプルトニウムや重い水素（三重水素トリチウム）を生産しながら同時に発生した熱で蒸気を沸かして発電もするというもの。ソ連はいままで、東欧圏を中心に二十六基の発電炉を輸出しているが、それはすべて軽水炉で、RBMK型を一基も輸出していないのは、そういった理由からである。

実はそれまでアメリカにもRBMK型と類似の型の軍用炉（その一部は発電もしていた）が五基あった。チェルノブイリ事故がおき、これらの炉の安全性が米議会などできびしく追及され、結局全部が閉鎖に追い込まれた。そればかりでなく、軍用炉にまつわる廃棄物のずさんな管理状況まで表面化し、その後始末の費

用だけで一六〇億ドルはかかることが判明し、代替の軍用炉などとても着手できない事態となった。（表）

**核兵器の供給源が細る**

このようにして、米ソは両国ともに原水爆の主要原料の新規供給源を失なってしまう。とくに最新鋭の核兵器は、つねに新鮮な原料を準備しておかねばならないのに、米ソともその供給源が急に細ってしまった。こんな相身互いの事情が、実は八七年の降ってわいたようなINF（米ソ中距離核戦力）全廃条約の合意のきっかけであった。当時一部の軍縮専門家の人から「チェルノブイリ効果」という言葉をきき、我々平和利用関係者を驚かした場面もあったが、この効果は、そ



もり・かずひさ 社団法人日本原子力産業会議専務理事。一九二六年広島生まれ、京大理学部物理学科卒。中央公論社、電源開発会社、東京十二チャンネルなどを経て、六九年日本原子力産業会議専務局長、七二年理事、七八年以來現職。

の後もじわりじわりと、核軍縮を加速するお手伝いをしているのも、考えてみれば皮肉なことである。

事故の「原因」なるものも、はっきりいって専門家間でまだ最終的には結着がついていない。事故直後、とにかくソ連独特の設計（と運転方法）なのだから、まずはソ連の専門家に口を割らさねばらちがあかない。欧米も、日本も、非難を

チェルノブイリ事故後停止となった米ソの軍用炉

【アメリカ】		
N原子炉*	ワシントン州	黒鉛チャンネル炉
C "	サウス・カロライナ州	
		重水チャンネル炉
K "	"	"
P "	"	"
L "	"	"
【ソ連】		
チェリアピンスク炉*	5基	黒鉛チャンネル炉
クラスノヤルスク炉*	5基（推定）	"

\*印は発電もしていた

したい気持をおさえ、「貴重な(?)経験と一緒に検討しよう」とやんわりと働きかけた。そしてやっと半年後ソ連は、重い口をひらき、国際原子力機関の場に、同国の専門家を引張りだすことに成功した。そこで事故の「シナリオ」なるものはじめて提出されたのだが、それは一応辻褄の合うもので、西欧側もその異常な経緯にあっけにとられながらも、謙虚に教訓を引出す努力を行ってきた。

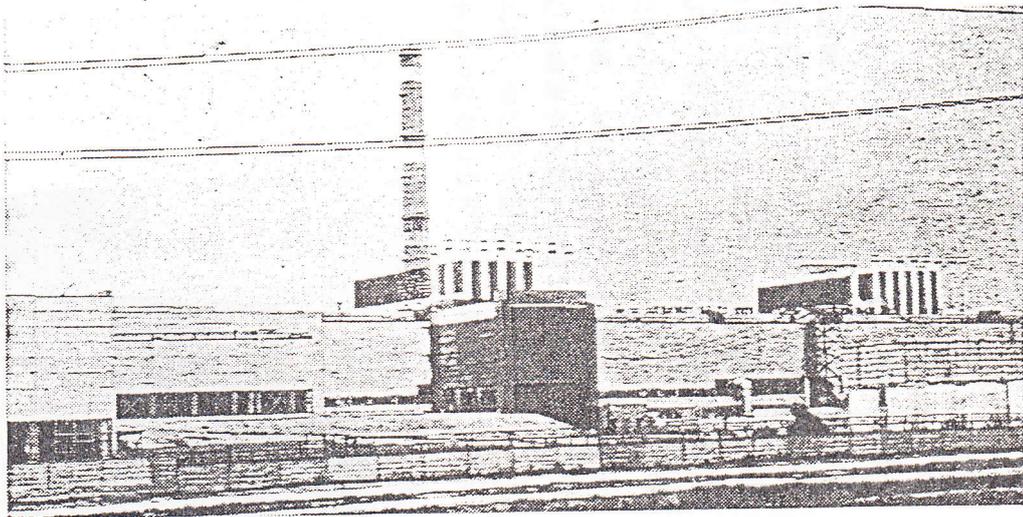
### 「設計か運転か」の議論

ところが、ここ一年あまり、ソ連の専門家の間で事故原因をめぐって議論が再燃する兆しがある。一時RBMKは基本的に問題があるから今後は建設しないとソ連ははっきり言明していたのが、最近では「RBMK型の方が成績がいい」(四月、コノワロフ原子力大臣——当時)などという発表があったりしている。

その一方、日本の新聞でもソ連の或る共和国の専門家の表面上の表現をとらえて、「設計に原因ありと見解を変更した」などと特ダネのように掲載されたりして

いるが、もともとこの種の巨大技術の事故原因を「設計か運転か」と短絡的に追うこともこっけいなことである。それよりも、このようなソ連の専門家の動きの中には、チェルノブイリ事故が連邦側とロシア発祥の地の誇り高きウクライナ共和国との間の対立に微妙な影を落していることもあって、一種の生き残りをかけた専門家間の責任のなすり合いの様相も感じさせる。(簡単化して言えば、「設計が悪い」となればこの炉をおしつけた連邦側の責任が重くなるし、運転が悪いとなれば暗に「共和国の責任だよ」ということに通ずるわけである)ベレストロイカの前途また多難というべきである。

事故は六年前の四月二十六日、メーデー休暇の直前、早く「テスト」のノルマを果たし炉をとめて休みをとりたいと気もそぞろの運転者連、彼らはRBMK型の弱点など何も教えられていなかったし、ウクライナ共和国の電力公社は一方的に運転の継続を要求するといった状況の中で事故はおきた。おどろいたことに、建物続きのすぐ隣りの三号炉はあの  
大事故のおきたあと三十分間も「われ悶せず」と運転をつづけていたという。全くおそれ入る縄張りノルマ体制だ。  
開発初期の中心人物の一人で、最年少のソ連科学アカデミー会員のレガソフ博士は、前述の国際原子力機関での事故シナリオ説明の代表団長もつとめた人だが、この人は事故から丁度一年後、悲痛な遺書をのこして自殺している。その中で同氏は、設計の悪さ、テスト計画のお粗末さ、発電所幹部の思い上り等々の事実をあげ、自国の体制・運営に大きな失望をあらわにしつつ、結論として「結局この事故はひとつの大団円つまり悲惨なフィナーレであった。つまり何十年にわたり祖国ソ連に居すわってきた墮落しきった体制と習慣がつもりもって、ここチェルノブイリで頂点に達したのである」と悲痛な言葉でしめくくっている。  
ゴルバチョフをして真のグラスノスチにふみきらせたのも、チェルノブイリだった。現地の幹部、共和国、連邦の首脳がこの事故の重大さをひたすら隠しつつけるなかで、十日もたってはじめて、現



事故後、運転を再開した一号、二号炉

地入りをゆるされた一新聞記者（ブラウダ紙グーバリオフ科学部長）を呼び寄せ、ゴルバチョフ氏ははじめてその真相を聞いて愕然とする。ゴルバチョフはその一週間後、新聞の検閲を一気に廃止する命令を発するのだが、書記長就任ちょうど一年目だった同氏も、もしこのことが無かったら、新聞による世論操作というそれまでの特権を果たして放棄しえたであろうか。そしてこの降ってわいた「言論の自由」こそ、堰をきった超大国ソ連の崩壊のきっかけとなり、また同時に、チェルノブイリをめぐる情報の混乱の誘因でもあった。

### チェルノブイリ救援の大合唱

それにしても、その後チェルノブイリ事故後の人体への影響については、なぜこれほど情報が混乱しつづけているのであろうか。ソ連の医学専門家たちは事故以来、一貫して事故現場での被害者約三百名をのぞけば、直接放射線による被害者はみつからないと説明し、現地におきている放射能への過大な恐怖による

病気を防ごうと、躍起になって努力してきた。しかしその声は「奇形動物ができた」とか「近くの医者によれば白血病がふえている」といった報道の洪水の波間にかき消されてきた。駐日ソ連大使館の機関誌「今日のソ連邦」（九〇年四月号）までが、奇形の動物の写真を二頁見開きで大きく掲載し、日本の原子力反対の人が、「ソ連政府も奇形をみとめた」と大歓声を上げ、何の証拠でそれが事故の結果といえるのかという問い合せに戸惑う始末であった。

また、平均寿命男六十五歳（日本でいえば昭和三十年代初頭の値）という、ソ連国内の福祉・医療体制の不備が露呈し、対外援助を要請せざるをえなくなったソ連政府は、面子を保つため、つねに「チェルノブイリ救援」という表現を好んで使ってきた。これを受ける外国政府も、対ソ援助方針について腰がきまらないまま、「チェルノブイリ」という名のもとに、全く関係のない「奇進」を重ねている。

日本なども同様で、通称笹川財団の五

十億円をこえる「救援」も、そのほとんどがいわば一般の医療援助で、チェルノブイリには無関係なのである。つまり「チェルノブイリの被害者を救おう」といった合唱は、そういったソ連側の面子に配慮して、無関係は百も承知の人道的な好意にもとづくものか、でなければ、チェルノブイリの被害を誇大に演出することで、その信条を満足させる意図をもったものか、いずれかだといっている。その「信条」とは、ソ連中央の何十年にもわたる暴挙や無策を攻撃する材料にすることで、自己の主張を一層正当化したいとするものなどいろいろであろうが、その

対極にあるものは、チェルノブイリ事故の影響が誇大に喧伝されるほど己の信条に都合がよいと感ずる側の人々である。残念でいたましいと私は心から思うのだが、これらの動きに全く欠如しているのは、このような真実と虚偽が飛び交う混乱の中で、チェルノブイリの周辺の人々の心が、どんなに傷つけられているかという点である。

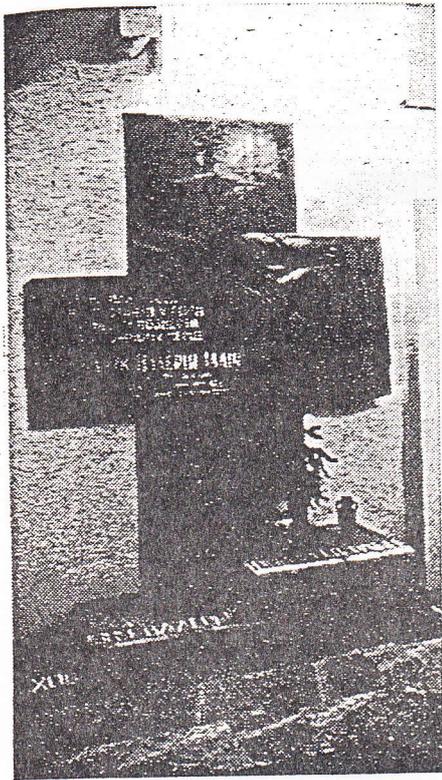
#### 国際調査で「影響でてない」

このような状況に業を煮やしたソ連政府は、一昨年十月国際原子力機関（IAEA）に対して、その実態を客観的中立

的に、またありのままに調べてほしいと申し入れた。具体的にいえば「事故後、自分たちソ連政府が、周辺の地域住民に對してとってきた、又とろうとしている対策は科学的に正しいものかどうかをきびしく科学的に判定してほしい」ということであった。

国際原子力機関は、この調査を色をつかない中正なものにすることを第一義と考え、世界保健機構（WHO）、世界食糧農業機構（FAO）、国連放射線影響科学委員会（UNSCEAR）など七つの国連専門機関に相談して専門家の推せんを受け、世界の放射線影響の権威ある学者二十名からなる国際諮問委員会を組織した。IAEAは単に事務局をつとめるだけで、調査内容や結果の判定はこの委員会に一切を委ねることでスタートした。その委員長には、ヒロシマ・ナガサキの影響を戦後四十年にわたって科学的に追跡しつづけている日米共同の「放射線影響研究所」の重松逸造理事長が選出された。

この委員会主導のもとに一年半にわた



事故犠牲者の慰霊碑

図1 白ロシアおよびロシア連邦共和国内の居留地で実施されたIAEAチームによる地表のセシウム汚染測定値と、ソ連が発表したセシウム地表汚染測定値との比較

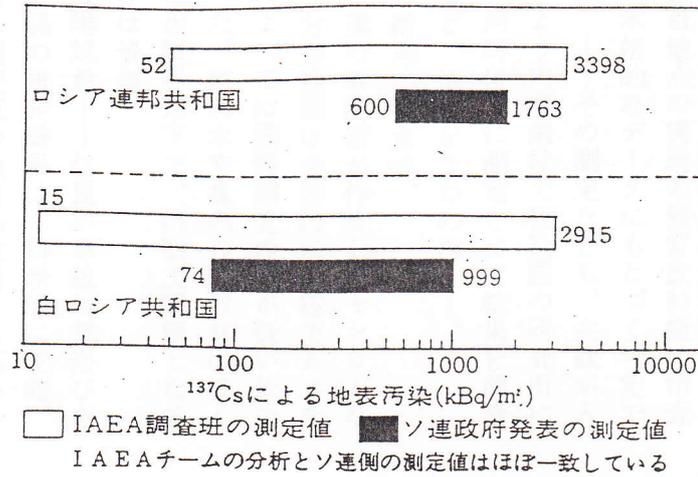


図2 白ロシアのブラギン地域で実施されたIAEAチームによるストロンチウム、およびプルトニウムによる土壌汚染測定値とソ連側の土壌汚染測定値との比較

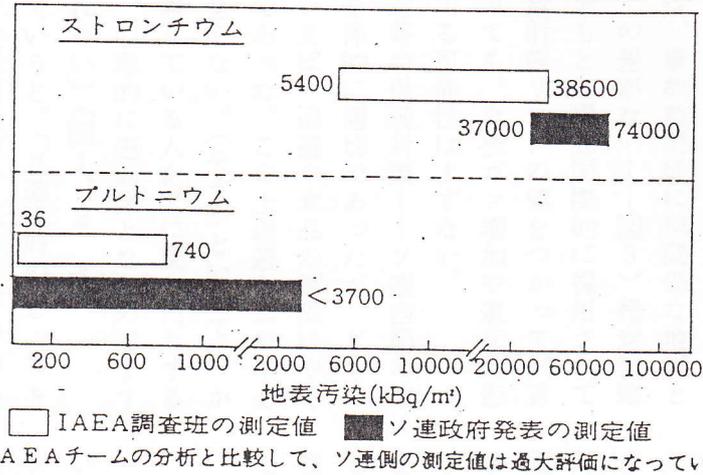
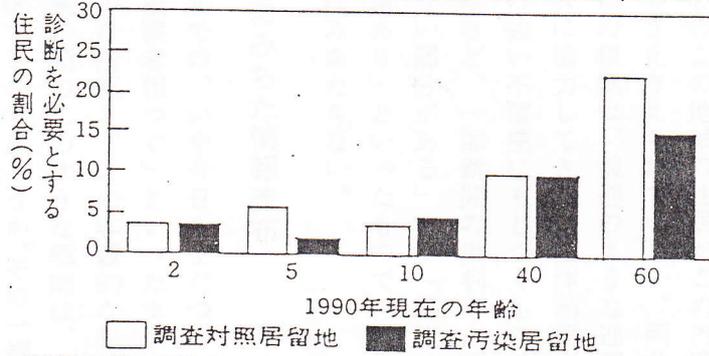


図3 選定居留地住民の一般的健康状態に関する評価 (IAEA調査)



放射線被曝に直接起因すると思われる健康障害は認められなかったが、汚染居留地、対照居留地で成人の10~15%がさらに医師の診断が必要と指摘された

り精力的な調査が行われ、去る六月にその結果が発表された。念のため付言するならば、これは単にソ連側の説明だけをきいて批評を加えるといった通り一遍のものでなく、実際に一万人に及ぶ周辺住民の体内放射能の精密測定や血液検査に加え、数百地点の実地の残留放射能の精査など、本格的なデータにもとづく判定であった。——その測定なども、主観が入らないよう内容厳秘で複数国の研究所に送り、同時併行に測定させて結果を照合するなど、慎重をきわめた——。

その結果の要点は、

○ソ連の専門家が作成したセシウムなどの分布地図は全体的に正確であり元素によっては国際調査の方が低い位であった。飲料水や食品の放射能は多くが検出限界以下で、摂取上問題となるものは皆無。

○被曝線量——住民が事故以来浴びた放射線の推定結果は、科学的に正確。むしろ調査班の独自推定値より高めのものも目立つ。

○健康影響——調査班による汚染地域

等の住民の健康調査では放射線被曝に直接起因すると思われる病気はみとめられない。(情報の混乱による) ストレスや不安といった心理的悪影響がいちじるしい。(何らかの病気の疑いがあり診断或いは治療を必要とする人の比率は、事故放射能に無関係な地域と比べての差がない——図3) 推定被曝線量をもとに現在国際的に採用されている放射線リスクの値をつかって試算してみても、今後ガン増加や遺伝的影響がでる可能性はまずない。

○退避等の保護対策——ソ連当局の措置は全体的に適切であったが、どちらかといえば、退避や食品の制限はやりすぎであった。この上退避をふやす必要は全くない。(そうかといって今から退避している人を元に戻したりするのは、心理的に逆効果となるのです(められない)(図1、2、3) 一言でいうと、「ソ連政府のとってきた住民を放射線障害から守るための措置、その基礎となった放射能などのデータはむしろ慎重すぎる位で全く科学的に

正しいものであり、また放射線被害は今のところ皆無である」ということに尽きる。そしてこの国際調査の報告書には、慎重に調査を行った範囲と限界を明記している。

この結果に対して、ウクライナ、白ロシア両共和国から強い不信が表明され、まだ肝心のこの地域の住民がこの内容を聞く機会さえ与えられていない。両共和国の不信の根拠は、前述のような連邦およびそれに協力してきた(旧体制側の)学者への強い不信感にもとづくもので、また日本など、一部新聞の批判も「調査していない部分がある」とか「調査の姿勢に問題あり」といったもので、科学的なもののみあたらぬ。

### 意図にみちた情報流布

これまでの、いや今日もまだつづいている「被害者相づく」といったセンサーショナルな情報と、この客観的な科学調査の結果の間のこの大きな乖離は、一体何を意味するのであろうか。その一端は、本稿の前半の記述の中にもあるが、次の

ようないくつかのまことに奇妙な出来事は、その真因を明快に浮きぼりにしてくれる。

ヒロシマに「招聘された被害者」

日本の大新聞に「チェルノブイリの被害者×名(多く子供たち)、検診・治療のためまたまた来る」という記事が、悲惨な気の毒な人々という説明つきの写真とともに何度大々に掲載されたことだろうか。広島の人々に頼んで調べてもらったところここ一年で地方紙で少くとも五十回、全国紙百回をかぞえる。いずれも最低三段ヌキの大きな記事で、ガンや甲状腺障害があとをたず現地は恐怖におののいている……。このほど「……を救う会」のまねきで、〇〇君と××嬢たち×名がヒロシマに治療にやってきた云々……という調子であることは皆さん周知のとおりである。

ヒロシマの放射線影響研究所等にきき、またこれら研究所の知人に何度かたずねたが、答えはいつも「イヤ全く問題ありませんでした。念のため体内放射能も測ってみました。それもシロでした」と判っておいたような答えでホッとしたことである。なぜその結果が記事にならないのだろうか。どうしてこう新聞記事はかたよっているのかと文句が出る時、よく聞く説明に「新聞は犬が人間を噛んでも記事にはしない。人間が犬をカメラば記事になる」といわれる。チェルノブイリからきた気の毒な方々が、すべて健康で問題ないのは、犬が人間をかむように、ありふれたことだから記事にならないのかと、人のいい私は、ふとそう考えたこともある。

ところが同種の情報は中々衰えをみせない。もう一度注意して記事をよくよんでみると、「私の病院では子供の白血病がどんどんふえています」などのべる向こうの医者の話が、写真入りで大々的に連載されたりすることは同じだが、最近の記事の中ではときどき(ほんの時々だが)隅の方に一言、「これらの病人は放射能との関係が明確ではない。そのことが一層不安をかきたてている」といった言葉が入っていることもあるようになった。

そして、もっと注意して連載記事などを読みなおしてみると、これも隅の方に「ヒロシマに行ってきた子供が健康と診断されて帰ってきたような例もあるけれども」という表現をみつけた。「チェルノブイリの悲劇」云々の大きな連載の隅にこんなことを入れているのが、記事の公正さということに、それでもいくらか郷愁をのこしている記者さんたちの筆なのであろうか。(念のために申しさえる、これらの「いいわけ」がついている数少ないケースは、IAEA報告発表のあとである)

遺伝的影響をめぐって

ヒロシマやナガサキには、現地或いはヨーロッパのジャーナリストと称する人が何度もやってきては、「ヒロシマで被曝者の子供に遺伝的影響がでない」と

「いうのはウソでしょう」とたずねまわった。たしかに四十数年前の原爆投下後しばらくの間は、ヒロシマでもそういった心配で被曝者は心を痛めた。お嫁に行けぬかもという不安で自殺された娘さんもおられた。

しかし、そういった心配は、その後二―三十年におよぶ七万人の「被曝二世」の調査で杞憂であることがわかるにつれ、今日ではそういった不安は忘れ去られている。そこへ、ソ連・東欧から来た前記の人々は「お金をもらって事実を隠しているのでは……」などしつこくききまわり、「事実として皆無」との答えを繰返し聞いて、(何の目的での来日かは想像にかたくないが)あきらめて帰って行く。ところが「だが帰国後そのことを正しく報道してくれたことは一度もないのです」とヒロシマの人々はなげいている。

### 五年間で七千人の「死者」

今年の四月二十六日チェルノブイリ事

故五周年の朝、日本最大の公共放送はトッブニュースとして次のようにのべた。それは、五年たった今日もチェルノブイリ周辺では発病者があとをたたく、悲惨な状況がつづいているとのべ、しめくくりとして「事故の後始末に従事した人々六十万人のうち、この五年間に七千も人が死亡したのです」とのべた。

この「……七千人……」の言葉をよくみると、ウソのことはないけれども、肝心なことが全く抜かしてある。もともと六十万人の集団があれば五年の間に平均的に何人の死亡者がありうるかは、死亡率から試算できる。六十万人で五年間七千人という数字はソ連の死亡率から計算すればむしろ少な目である。(ソ連の普通死亡率は日本人の一・七倍)何もこの七千人がチェルノブイリのためで亡くなられたわけではない。

実際、このことはチェルノブイリ作業に従事した人をつくっているボランティア「組織「チェルノブイリ同盟」の代表者V・ジョフコシートヌイ氏がはっきり述

べていることである。自分たちは決してこの七千人がチェルノブイリのためだといっているのではない。我々はこの未曾有の重大事故のさい、使命感にもえ身を挺してその復旧に当たった。浴びだ放射線も一般の人より多いであろう。だから国は当然我々を登録しその状況をしっかりと把握するのは当然だし、しかるべき報償も考慮すべきだろう。我々の組織はそれを要求するためのものであり、原子力に反対するためのものでもない。「早くしないと国の誠意を見ないで亡くなっている人もいる、といっているだけなのである」とのべている。

このことは大分前から伝えられていることで、この公共放送の省略は、意図的なものとしか考えようがない。

むすびにかえて

チェルノブイリ事故は、平和利用として全くとんでもない出来事であり、筆者はこの事故を大したことはないとか、また弁護したりするつもりは毛頭ありません

ん。それどころか、これを「他山の石」として原子力の関係者は肝に銘じて、自らの原子力発電のさらなる安全性を追求しなければならぬし、またそういう努力を国際的にもたしかかなものとする事は、日本の使命でもあります。

しかしながら、打ちつづく情報の混乱によって、チエルノブイリおよび周辺の方はどんな気持ちでいられるのでしょうか。おそらく結果的にみれば全く不必要な不安におとし入れられた人々、精神的なストレスからの病氣、放射能への恐怖から食事をとらなかつたために病氣になつた人々、はじめて健康診断をうけ病氣といわれたとたん「それは放射線のためだ」ときめつけられる人々、さらにあの

ナイーブな地域に闖入する異人種が持込むウイルスや細菌もガンや病氣をふやしている可能性もあるといえます。チエルノブイリの子供一人一人のために「楽園」をつくるというキャンペーンを張る新聞社もある。このように頭から一人一人の子供が病氣やガンになるときめつけるような似而非な「慈善」的な行為が、子供たちの心をどんなに傷つけるか、考えたことはおありなんでしょうか。ヒロシマ或いはビキニの経験、人々が如何にそれを悩み、ふみこえて今日にいたつたか、その歩みを知る日本人の一人として、私はチエルノブイリの方々の心中を察して心が痛みます。

世紀末をむかえ、世界は、日本は、多

くの問題をかかえています。エネルギー問題にしても、原子力発電にしても、賛否色々の議論のあることは結構だし、科学的でなくとも、信条として反対されるのも各人のご自由でしょう。また、ソ連ならびに各共和国が共産主義をなげうって歴史的改革にとりくむ勇氣もたたえたいし、そのためにありとあらゆる材料をつかつて互いに批判し、攻撃し合うこともやむをえないかも知れません。

しかしそのために、チエルノブイリの人々を利用し、その心をきりきざむようなことだけは、やめにしてほしい。ヒバクシャのころ、それはいいしれぬ脆さに満ちたものなのです。

# 東京創元社

世界の読書人を驚嘆させた、20世紀文学史上の事件  
**薔薇の名前**  
ウンベルト・エーコ  
河島英昭訳

キリスト教世界最大の文書館を誇る中世北イタリアの僧院で修道僧が次々に謎の死を遂げる。精緻な推理小説の構図の中に碩学エーコがしかけた、知のたくらみ。読書のあらゆる楽しみを秘めた、世界で一千万部の超ベストセラー。絶賛発売中！

四六判 上・下巻 各二、〇〇〇円

\*定価は税込み

## 創元ミステリ'90

創意あふれる創作推理の新シリーズ  
**合本・青春殺人事件**

辻真先 四六判 四四八頁 二、三〇〇円  
辻ミステリの原点、「仮題 中学殺人事件」「盗作 高校殺人事件」「改訂 受験殺人事件」に、短編二件落着く、を加えて集大成した待望の一卷。

東京都新宿区新小川町1-5  
〒162/振替・東京6-1565  
TEL 03-3268-8231(営業)